

ヘンリ・ジェイムズの *The Bostonians* について

—— オリーブのニュー・イングランド清教主義の特性 ——

玉 崎 紀 子

The Bostonians は、初期の国際関係をテーマとする物語で確固とした作家の地位を占めた、Henry James が、*The Portrait of a Lady* で一つの境地を得たあと、しかしF. O. Matthiessen のいう “The Major Phase”⁽¹⁾ には至っていないその両者の間の1885年2月から1886年2月に *The Century Magazine* に連載され、1886年に出版された作品である⁽²⁾。

今日的な意味で、*The Bostonians* を最初に問題にしたのは、Edmund Wilson (1934)で⁽³⁾ これを失敗作としながらも Olive と Verena の二人の関係を小説の中心とみて、Olive の Verena への “Lesbian passion” を指摘し、悪評のみで無視されてきた *The Bostonians* の批評に新局面を開いた。F. R. Leavis (1948) も⁽⁴⁾、その Lesbian 的關係が重要という解釈には従うが、それ以上に次にあげるような点で、この小説を非常に高く評価する。すなわち次のような作品の初めの部分を引用し、

Toward nine o'clock the light of her hissing burners smote the majestic person of Mrs Farrinder, who might have contributed to answer that question of Miss Chancellor's in the negative. She was a copious, handsome woman, in whom angularity had been corrected by the air of success; she had a rustling dress (it was evident what *she* thought about taste), abundant hair of a glossy blackness, a pair of folded arms, the expression of which seemed to say that rest, in such a career as hers, was as sweet as it was brief, and a terrible regularity of feature. I apply that adjective to her fine placid mask because she

seemed to face you with a question of which the answer was preordained, to ask you how a countenance could fail to be novel of which the measurements were so correct. You could contest neither the measurements nor the nobleness, and had to feel that Mrs Farrinder imposed herself. There was a lithographic smoothness about her and a mixture of the American matron and the public character. There was something public in her eye, which was large, cold, and quiet; it had acquired a sort of exposed reticence from the habit of looking down from a lecture desk, over a sea of heads, while its distinguished owner was eulogized by a leading citizen. Mrs Farrinder, at almost any time, had the air of being introduced by a few remarks. She talked with great slowness and distinctness, and evidently a high sense of responsibility; she pronounced every syllable of every word and insisted on being explicit. If, in conversation with her, you attempted to take anything for granted, or to jump two or three steps at a time, she paused, looking at you with a cold patience, as if she knew that trick, and then went on at her own measured pace. She lectured on temperance and the rights of women; the ends she laboured for were to give the ballot to every woman in the country and to take the flowing bowl from every man. She was held to have a very fine manner, and to embody the domestic virtues and the graces of the drawing-room; to be a shining proof, in short, that the forum, for ladies, is not necessarily hostile to the fireside. She had a husband and his name was Amariah. ⁽⁵⁾

このような文は Dickens 流の風俗喜劇であり、しかもおよそ Dickens とはちがう精妙さをもつ、この機知に富む喜劇性と Olive の代表する New England の puritan 文化を中心とした真面目な心理研究の故に、James によってのみ書かれることができ、しかも James に普通みられないような明白な生命力を持つ作品となっていると賞賛する。さらに Marius Bewley (1952) ⁽⁶⁾ は *The Bostonians* と Hawthorne の *The Blithedale Romance* (1852) との類似性を論じ、James は無意識のうちに *The Blithedale Romance* と似た人物関係を描き、アメリカ文学の伝統を明らかにするが、Hawthorne と異なり Olive をより悲劇的に描くことに成功し、Hawthorne を超えているとする。作品全体を witty で deliciously comic とその喜劇性を高く評価するのは、Leavis と同様である。

恐らく、Bewley の論文と同じ頃に書かれた1951年の Daniel Lerner & Oscar Cargill の “Henry James at the Grecian Urn”⁽⁷⁾ は、ギリシア悲劇、特に Antigone の影響を指摘し、Olive と Verena の Lesbian 的關係よりも、Verena をはさんだ Olive と Basil の争いに注目する。二人によれば主題は “the conflict itself”, “the clash of characters” であるという。これはもちろん Lionel Trilling の *The Opposing Self* (1950) に収められた「*The Bostonians* 論」⁽⁸⁾ にある、James の作品は単純化すれば “the conflict of two principles, of which one is radical, the other conservative”⁽⁹⁾ を敷衍して Olive と Basil の対立を重視する潮流である。それ以後、Leon Edel も中心は Olive と Basil の “a struggle for power and possession”⁽¹⁰⁾ と言い、Verena をめぐる Olive と Basil の争いという解釈が主流を占めている。

すなわち、女性解放運動を諷刺喜劇として扱い、無垢な女主人公 Verena を男性の代表 Basil が、男性を憎む異常な女性運動家 Olive から救いだすというように、女性化したアメリカ社会を憂う Henry James が Basil を代弁者として熱烈な求愛により Verena を屈服させ、悪女 Olive に勝利をおさめさせる——男性対女性の争いという見方が一般的である。しかし一方では Basil 自身も諷刺の対象であることは、次に述べる Basil の人物描写で明らかであり、Olive も Basil も同じく “egoist”⁽¹¹⁾ という解釈の方がむしろより妥当ではと考え、さらに一步おしすすめて Basil と対立させた時、Olive は悪女ではなくむしろ女主人公であると考えてこの作品の一解釈を試みたい。

Lionel Trilling のいう James の作品に常に存在する二つの価値の「葛藤」を、これまでの批評家はこの作品の主題としながらも、その葛藤する二つの対立、Olive と Basil の対立を、女性対男性という単純なものとして見過し、その二人の特性を検討することがなかったが、本論では、この二人の特性を詳細に分析することによって、異色的なアメリカものとされるこの作品が James 文学の普遍的な根本命題をやはり持ち、Olive

がその特性によって初期から後期への橋わたしの女主人公を表わしていることを明らかにしたい。

まず, Trilling のいう radical と conservative ひいてはアメリカ対ヨーロッパにもなる葛藤⁽¹²⁾ を, この作品にあてはめる時, Verena はヒロインとして Olive に対するのではなく, Olive 対 Basil としてその対立があることを理解しなければならない。確かに, Olive の偏狭さと男性への敵意に対して, innocence を持つ Verena がヒロインとみえるけれども, Verena にではなく Olive に New England の puritanism の特性が与えられており, それに対立するいわば墮落したヨーロッパの特性が Basil に与えられている。Olive は “you are my conscience” (p.136) と Verena に言われる程の道徳性を持ち, 犠牲, 自己放棄という spirituality を理想とするのにひきかえ, Verena を恋へと誘う Basil は sensuality を代表している。さらに Olive は理想を実現しようと女性運動に参加する radical であるのに, Basil は男性が支配する形の因襲的結婚観を当然とする conservative である。James の求める「生き生きとした充実した生」⁽¹³⁾ は, New England の道徳性に, ヨーロッパ文明の華である感覚性を融和させたものであるが, New England の人には, ヨーロッパの円熟した特性が欠けており, ヨーロッパの人々は精神の高みを目指す道徳性を理解しない。その感覚性は文明の華であると同時に墮落をも合わせ持たざるを得ない。そしてその故に James 文学では道徳性を追求するアメリカ人が, ヨーロッパ文明に接して苦難に陥ることになる。すなわち, しいて色分けすればヨーロッパの感覚性の方が否定的要素を持っている。ここに Basil が単に James の代弁者として, Olive を非難する立場にあるとは言い切れず, 彼自身も批判されるべきことが予見される。以下 Mrs, Luna, 次に Miss Birdseye, Basil そして Verena の各人物像との対比により, 明らかにされる Olive の特性を中心にみていきたい。

作品の冒頭は, Olive の正直さについての彼女の姉 Mrs Luna の言葉で, 機知に富んだ風俗喜劇のみごとなすべりだしとして賞賛されてきているが, それだけでなくその喜劇性の中に Olive の人物を巧みに明らかにし

ていることに注目したい。“Olive will come down in about ten minutes” (p.5) と Mrs Luna は Olive の伝言として言うが続いて “about ten minutes” という Olive の用語は「きっかり10分とは言えないが、5分でも15分でもない。9分か11分だろうから」という意味だと Mrs Luna が解き明かすとき、社交的で偽りにみちた姉に比べ厳しいまでに正直になるろうとする Olive の性格を露わにする。そしてその後も、ヨーロッパに長く居て無国籍アメリカ人となっている Mrs. Luna であるだけに、この作品で唯一のアメリカ対ヨーロッパの対立として、Olive の New England puritanism の特性を明らかにする。

すなわち Mrs Luna はその名前からも月一狩の女神, chase といった sensual な image を持ち、その女らしい美貌は, “a fair, plump, smiling woman” (p.5) とか “she was sufficiently pretty” (p.7) と描写され、初対面の Basil に対する彼女の社交性や Boston の精神性を認めない現実主義から、ヨーロッパ文明を現わす。それに対し Olive はオリーブの実で、彼女の “green eyes”, それに “she (=Olive) was not old — She was sharply young” (p.83) という描写からも、未熟さ、生硬さを表わし、Mrs. Luna の sexuality と全く逆の sexual coldness, purity を持つことが明らかになる。Mrs. Luna は自ら言う “painted Jezebel” (p.9) という言葉が最もよく表わすように、外見的には美しいが、虚栄に満ち墮落したヨーロッパ文明と同じで、神を恐れず内面的真実がない。道徳的でないために、New England puritanism の伝統にある Olive を狂信的と考え “radical” と揶揄するのである。又、彼女の墮落は、Basil が彼女を魅力的と思いながらも、会う度に “Mrs. Luna was familiar — intolerably familiar” (p.6) とか “impertinent” (p.7) 又 “insincere” (p.83) と必らず批判的に評価することでも明らかである。そして逐には彼女の誘惑を “vice” とまで感じるのである。

Mrs. Luna continued, making her points, as she always did, with eagerness, though her roundness and her dimples had hitherto prevented her from being accused of that vice. (p.82)

このように Mrs. Luna の世俗的な社交性は、Olive の控え目な正直さをひきたたせるが、しかし道徳的で、常に “not a pleasure, but a duty” (p.17) と見える Olive より、Mrs. Luna を Basil は魅力的と思う。これは Basil が pleasure を好み、感覚性を代表する点で、Mrs. Luna と同質であるから当然といえる。

このような Mrs. Luna と Basil に対して Olive は、清らかで真面目な virtue を持つといえる。すなわち、

The most secret, the most sacred hope of her (=Olive's) nature was that she might some day have such a chance, that she might be a martyr and die for something. (p.13)

という Olive の希望は、まさにヒロインの理想である。そしてちょうど *Middlemarch* の Dorothea Brooke が自分を犠牲にして、夫を助けたい、又、夫に知的に高めてもらいたいそのような結婚がしたいと憧れるのと同じく⁽¹⁴⁾ 少女趣味的理想で人生の現実を無視した理想と言える。しかし James のヒロイン達は、必ずこの人生を理想化して眺める特性を持っており⁽¹⁵⁾、この故に Olive もヒロインの一人と言える程である。この精神主義 spirituality は、Mrs. Luna の現実主義と多大の開きがある。そして Olive の夢は、後期の James の理想である “disinterested love” に結びつくものである。

さらに Olive が New England puritanism の伝統にあるヒロインであることは “a plain dark dress” (p.10) を着、 “delicate face” (p.11) や “white skin” (p.17) を持ち “pale” (p.11) “morbid” (p.11) と描写されることで明らかとなる。なぜなら、この容貌は、あまりにも *The Wings of the Dove* の Milly Theale に似ていて、悪女のものではない。⁽¹⁶⁾ 特に “her features, though sharp and irregular, were delicate in a fashion” (p.17) という描写は Milly と同一で、Olive の富、殉教者になりたいという理想、彼女の “tragic shyness” (p.10) から、Milly のたどる悲劇的運命を連想させるものが Olive にはある。

従って、Olive は Mrs. Luna との対比により精神と肉体、病と健康、義務と享楽、さらに理想と現実などの特性により、それぞれアメリカの道徳性とヨーロッパの感覚性を表わすことが明らかにされる。しかもこの場合、アメリカの価値、Olive の特性は、後期作品のヒロインに与えられる肯定的価値である。

Mrs. Luna にもまして重要なのは plot 上に深く関わる Olive と Basil の対比である。Basil は Mrs. Luna 程のヨーロッパ文明への関係はないものの、Trilling のあげる最初の principles, radical と conservative の conservative を表わし、Olive と対立する。まず冒頭から、“provincial” (p. 11), “narrow” (p. 11) と繰り返し言及され保守的なことは明らかである。しかし conservative という特性を持ってはいても Basil は南部の貴族階級を代表しているのではない。南部ではなく “Mississippian” と James は強調しており、ヨーロッパ文明に結びつく南部の貴族階級とは縁遠く、むしろ貧しく知的教養の点でも先に述べた “provincial” で劣るわけである。しかし南部故の保守性をもち、それが、Olive の女性解放論と対立する Basil の因襲的な結婚の擁護を説明するものとして、James が考えた理由である⁽¹⁷⁾。女性化するアメリカを救うという Basil の意見は、James の Notebook の序言との類似により、James を代弁すると言われるが、それより彼の保守性がよく表わされている⁽¹⁸⁾。

‘To save it from what?’ she asked.

‘From the most damnable feminization! I am so far from thinking, as you set forth the other night, that there is not enough woman in our general life, that it has long been pressed home to me that there is a great deal too much. The whole generation is womanized; the masculine tone is passing out of the world; it’s a feminine, a nervous, hysterical, chattering, canting age, an age of hollow phrases and false delicacy and exaggerated solitudes and coddled sensibilities, which, if we don’t soon look out, will usher in the reign of mediocrity of the feeblest and flattest and the most pretentious that has ever been. The masculine character, the ability to dare and endure, to know and yet not fear reality, to look the world in the face and take it for what it

is—a very queer and partly very base mixture—that is what I want to preserve, or rather, as I may say, to recover; and I must tell you that I don't in the least care what becomes of you ladies while I make the attempt!' (p. 290)

それ故彼の評論は300年前だったら受け入れられたであろうがと言われ (p. 163) つき返されるのである。

その保守性の故に Basil は Verena の案内してくれる Harvard 大学の伝統と雰囲気魅せられ, “This is the place where I ought to have been”, と言い (p. 207), the Memorial Hall of Harvard でも, 「北軍」の兵士達ということより, Basil が何より強調するのは兵士達の男性的勇敢さである。

‘Well, so (=brave) they were — I know something about that’, Basil Ransom said. ‘I must be brave enough to face them — it isn't the first time’. (p. 209)

兵士のその勇敢さは男性的という美点の他に, sexual aggressiveness を暗示し, Olive の defence に対する Mrs. Luna の attack という特性から, Basil がここでも Mrs. Luna に近いことを示す。

彼の名前 Basil の語源がギリシア語の “royal” であることから, 彼が “radical” Olive に対立する保守性をもつ事が明らかである。

次に Basil の感覚性は, まず彼の男性的容姿で示される。彼は “tall and lean” (p. 6) で “such a fine head and such magnificent eyes” (p. 6) を持ち, 額は “high and broad” (p. 6) であり,

his thick black hair, perfectly straight and glossy, and without any division, rolled back from it in a leonine manner. (p. 6)

と描写されるライオンのたて髪のような黒髪は, 明らかに男性的資質を強調している。Olive の病的な性質は “tremour, quaver, terror, anx-

ious, agitated, excitement, afraid, dumb” (pp.19-20) として表わされるが、それに対して、Basil は、“strength” (p.35) “vigorous” (p.35) という描写以外に、快活で “a handsome joker” (p.80) (Verena は Basil をそう感じる) でありヨーロッパ社交界流の Mrs. Luna との会話を楽しみ、そして女性との関係において、“gallant” “chivalrous” と頻繁に言及され、彼の美貌、健康、力、快活、享樂的という点で、Mrs. Luna と同じく感覚性を代表することが明らかになる。

ところが彼の感覚性は gallant, chivalrous という美点に留まらず、amorous といえるヨーロッパ文明の corruption に相当する欠陥をも合わせ持つ。なぜなら、Verena を一目見て、魅きつけられたのに、その後 Verena が Olive とヨーロッパ旅行中の1年は、下宿先で a little variety-actress とつきあい又 Mrs. Luna と親しく交際し、Mrs. Luna の手筈を楽しみ、結婚しようかと考えているのであるから。

Olive を初めて訪問した時には、この culture の現われている客間の持主 Olive と結婚したら成功できると、愛からではなく、Olive の富裕をあてにして打算をする。

It came over him, while he waited for his hostess to reappear, that she was unmarried as well as rich, that she was sociable (her letter answered for that) as well as single; and he had for a moment a whimsical vision of becoming a partner in so flourishing a firm. He ground his teeth a little as he thought of the contrasts of the human lot; this cushioned feminine nest made him feel unhoused and underfed. Such a mood, however, could only be momentary, for he was conscious at bottom of a bigger stomach than all the culture of Charles Street could fill.

この引用の “a partner in so flourishing a firm” (p.16) という言葉には（愛情という）精神的価値を無視して、business として結婚をみる Basil の現実主義がみられる。“mercenary” (p.16) ではないと作者はいうが、Olive と Mrs. Luna の両姉妹との結婚を次々に考える時の Basil は相当に金めあてであり、彼の gallantry と Verena への情熱的な恋と

いう点を好意的にみても、business としての結婚観や、Mrs. Luna のみせかけの愛に惑わされ、それにのってみようかと考える Basil はおよそ純愛の資質をもった青年らしくない。法律事務所でも成功せず、2年もの間貧乏暮らしをし、政治家となる夢をもつといいながら政治評論が小説の結末に一篇採用されたきりというお粗末さは、Basil には男性的容貌の魅力しかないのかとさえ思える。

打算的な Basil に、彼の愛の質についても読者は疑問を感じるが、一般に情熱的と解される Verena への求愛は、Olive との闘争心ゆえのすぎましい執心にすぎないと思わざるを得ない。それはすでに物語の始まりで、Olive の客間の culture を食い尽しても足りない彼の胃、“underfed”で“a bigger stomach” (p.16) と彼の欲望の強さが語られて、彼の感覚性の中にある egoistic な執着と、好色なまでの強い欲望といった否定的特徴を明らかにする。

次に Olive の富裕な New England 文化の伝統は、明らかに Basil の壊滅された南部の財産と対比されているが⁽¹⁹⁾、Olive の客間が良質な文化を表わすのに、Basil には cigar と brandy が思い浮ぶだけのそれも、南北戦争前の comfort といった“simple taste”しかない。彼は New York の下宿でも“shabby rooms in a somewhat decayed mansion” (p.160) で、“gentility”のふりは不可能なひどい所に住むと語られる。従って彼は貧困の故に自己追求に熱心で、利己的な成功の夢を追うといった現実的で、物質的価値を重視する態度をもつといえる。それは Ransom という彼の姓が「身代金、脅喝によって得る金」といった、金を重視し攻撃的で悪事の連想がある意味を持つことでも明らかである。

James 自身は、物質的余裕があって、その基盤にたって衿持をもち、自己犠牲の高みへと向上しようとする New England puritanism を理想としながら、フランス的感覚性の豊かなしかし墮落した特性をもつヨーロッパの文明に憧れる。従ってしばしば James の作品では、美・芸術、culture を代表する人は賞賛される。とはいっても Gilbert Osmond の如く美術品を収集しようとするだけの悪人として表わされる人も多い。しかし

美をもたぬ人, 美しくない所に住む人は, 善ではないとは言える。Olive と Basil はその美=善の図式でも対立する。そしてそれが, それぞれの人物の背景, 家を使った image で明らかにされる⁽²⁰⁾。

すなわち Olive の客間は上品で, 家具や室内装飾に culture が現われていると, Basil に評されるし, Basil は “too simple” (p. 14) “primitive” (p. 14) “Boeotian” (p. 11) と描かれ, New England つまり Olive の住む Boston の知的教養にあふれた文化との対比がある。

次に, 女権運動家のはしりである Miss Birdseye の客間は全てを貧者に与え, 大義に捧げ, 家具装飾なしのみすぼらしい室であるが, その形は不思議なことに Olive の客間と同じく細長い “narrow” な長方形の室で, New England 伝統のきまじめな理想主義と, その偏狭さを表わす。しかし貧困の故に, Miss Birdseye の家には Olive の趣味の良さはなく, *The Europeans* の Felix Young が賞賛する雰囲気や清い美しさはない。⁽²¹⁾ simple のみで dirty とされる程であるから。

New England 文化を代表する家は, Olive の家にしても, Miss Birdseye の家にしても sexual coldnessに通じる知的な雰囲気, winter, snow, ice のimageを持つのに (pp. 75-6), Mrs. Luna が Basil と過ごす室は, 冬の晩にもかかわらず comfortable と Basil に思わせるものである。

The lamp-light was soft, the fire crackled pleasantly, everything that surrounded him betrayed a woman's taste and touch; the place was decorated and cushioned in perfection, delightfully private and personal, the picture of a well-appointed home. (p. 169-70)

しかし coldness を感じるほどの bareness をもっていても, Miss Birdseye の家は彼女が moral needs によってのみ生きてきたからだと言われ, 後に言及する趣味も悪く俗悪で不潔な Verena Tarrant の家とは, 対照的に弁護されている。しかしこの貧困の故に, Basil と握手する Miss Birdseye の手が “a delicate, dirty, democratic little hand” (p. 25) と描かれ, “a slender white hand” の Olive の手と “delicate” が一致

するものの、美醜の差をもつことになる。

従って、Miss Birdseye も Olive も puritanism の伝統に相応しく、理想主義を代表し、sensuality に対立しているのだが、その語り口には常に差がある。Olive には good breeding からくる美があり、洗練、趣味の良さがあるのに、Miss Birdseye は “essentially formless old woman, who had no more outline than a bundle of hay” (p.27) と喜劇的に諷刺されるのみである。偉大な女性運動家 Mrs. Farrinder にしても “majestic”, “copious”, “terrible regularity of feature” (p.29) と容姿が諷刺の対象となり、puritanism を代表する人は女らしい姿を持たぬと描写されるのに、sensuality の立場の Mrs. Luna となると女性的魅力が、良きにつけ、悪しきにつけあふれているのである。

さて、最後に、女主人公とみる評者の多い Verena Tarrant も Olive との対比でとらえてみたい。Verena は American innocence を表わすヒロインとして解されがちであるが、Olive と比べた時、正しく New England puritanism の伝統にあるとは思えない。すなわち、北部の有名な奴隷廃止論者 Abraham Greenstreet を母方の祖父としている点で、Verena は立派な伝統をうけついでいるが、その母が bad taste によって催眠術師 Selah Tarrant と結婚して生をうけたことや、その育ち、教育によって正統からはずれている。父親の名が Anglo-Saxon でない点、その職業が怪しげな点、父親自身が Gothic romance の悪人の如きうす気味悪い容貌で、

‘he was simply the detested carpet-bagger. He was false, cunning, vulgar, ignoble; the cheapest kind of human product’. (p.51)

と描写される点、又、Gothic wizard の如き “the wings of his long waterproof” (p.52) の服装といった特徴は、彼を評する “varlet” (p.51) という Basil の語を正当化する。そして “Tarrant’s grotesque manipulations” (p.52) と語られる Verena の演説への援けは、そのまま Verena をあやつり、利用する彼の特性を示す。

Verena 一家が放浪の末やっと落ちついた借家も New England 文化の清らかな美しさとは異質の物である。

It seemed implied in the very place, the bald bareness of Tarrant's temporary lair, a wooden cottage, with a rough front yard, a little naked piazza, which seemed rather to expose than to protect, facing upon an unpaved road, in which the footway was overlaid with a strip of planks. These planks were embedded in ice or in liquid thaw, according to the momentary mood of the weather, and the advancing pedestrian traversed them in the attitude, and with a good deal of the suspense, of a rope-dancer. There was nothing in the house to speak of; nothing, to Olive's sense, but a smell of kerosene; though she had a consciousness of sitting down somewhere — the object creaked and rocked beneath her — and of the table at tea being covered with a cloth stamped in bright colours. (p.100)

それは“the bald bareness”という点では Miss Birdseye の家に通じるが、清潔とはほど遠い、乱雑さ、empty, bare より劣悪な意味を内含する“naked”な庭，“rope-dancer”のように進まないで玄関に行けないという品位のなさ、椅子とも言えない代物や灯油の匂いも文化からかけ離れ、Olive をお茶に招きながら俗悪なテーブルクロスがかかっていること等全てが、貧困というだけではなくその欠陥が示されるものである。この家には、いわば Olive に Verena を「売り渡す」悪の匂いがつきまわっている。

それにもかかわらず Verena は、James のヒロインらしく American innocence を持つ美しい少女として登場する。

Though she had grown up among people who took for granted all sorts of queer laxities, she had kept the consummate innocence of the American girl, that innocence which was the greatest of all, for it had survived the abolition of walls and locks: (p.106)

実際、環境にもかかわらず、彼女は“You are so simple——so much like a child” (p.70) と Olive に言われる程、若く何も知らない。新しい帽子をかぶり、母から20セントもらって Olive の家に出かけるのは喜びだと語られるが、実に simple enjoyment である。母に従い gilt buttons のついた趣味の良くない服を着、母の言う行儀作法をうのみにして、又、

父が喜ぶからと一種の medium⁽²²⁾ となって inspirational speaker となる等、全て非常に無知で従順な彼女の特性を明らかにする。

しかし、男性から見れば愛らしい娘かもしれないが、Olive と Basil の二人に支配されて自分の意志も持たない彼女は、New England のアメリカ娘の伝統とかけ離れている⁽²³⁾。Isabel Archer が何より求める independence と liberty に欠け、そしてアメリカ娘が Emerson からうけついで self-reliance にはほど遠い。又それ故に、Isabel, Milly などのように精神的高みへ向上しようとする特性をもたず、ただ innocence でむしろ ignorance という欠点にも通じる。これは *The Portrait of a Lady* 以降のヒロインにはあり得ない特徴であり、初期の innocence なヒロインの生き生きとした美しさを持つものの、Daisy Miller の manners を知らない故の過失といった弁護もされず、Verena は真のヒロインとは言い難い。

この Verena に欠けている道徳性や、理想こそ Olive がその悲劇的なまでの自己犠牲への憧れとして持っている美点である。この意味で Olive はその道徳性により、Verena はその innocence と美貌により、真のヒロインの一面つつを持っており、二人が一緒になって初めて New England 文化の伝統をひく “an heiress of all ages” たる真のヒロインとなると言える。だから Olive が Verena を自分の許にひきとり、Verena の gift と Olive の富、教養を使って新しい女性運動に役立つことができると考えるのは全く妥当と言わねばならない。

Verena が真のヒロインたるには、不完全な特徴をもつことは、Verena の父方と母方の二つの特性の混合からきている。それは奴隷を30年間もかくまった radical な母故に、Olive の新しい女性運動 New England の radicals と通じる面もあるが、異端の devilry を求める “witches, wizards, mediums, spirit-rappers” (p. 17) の仲間である父、Selah は、その宗教的理想の高さ、道徳性の点で puritanism と全く反している⁽²⁴⁾ といった二つの要素に影響されているからである。

従って、Verena は初めて会う Basil に何よりその「奇妙な混合」を印象づける。

He had never seen such an odd mixture of elements; she had the sweetest, most unwordly face, and yet, with it, an air of being on exhibition, of belonging to a troupe, of living in the gas light, which pervaded even the details of her dress, fashioned evidently with an attempt at the histrionic. If she had produced a pair of castanets or a tambourine, he felt that such accessories would have been quite in keeping. (p. 51)

すなわち unwordly で世俗をはなれた innocence をもつと同時に、芸人的様子、偽面をかぶった仮りの“histrionic”な特性を中に秘めているというのである。このすぐあとに Verena は、貧血症で“deceiver”だと Doctor Prance が言い、plot 上も、Verena は Basil との交際について Olive を欺むき続けるし⁽²⁵⁾、James が墮落した悪人の持つ特性とする manipulation が先述したように手を使う healer としての父に与えられている事など、Verena に Olive の正直と正反対の偽りごまかしの特徴が暗示されていることは、注目すべきである。

さらに、Verena の容姿は、貧血症による青白さと delicate な顔色により、Olive と通じるものの、Miss Birdseye の会合に集った誰よりも“far more colour” (p. 51) や“brightness” (p. 51) をもつと描写され、地味な黒い服の Olive とは反対に“red hair” “rad fan” “crimson sash” と彼女の派手やかな色が強調される。さらに汚れなさを表わす白い服を着、神々しい光の image で語られ、Olive につきまとう「死」「悲劇」の匂いはない。彼女の名前が vernal (春) を表わすことから、春のような若々しさを特性として明らかに Olive と対立している。

There was, however, something rich in the fairness of this young lady; she was strong supple, there was colour in her lips and eyes, and her tresses, gathered into a complicated coil, seemed to glow with the brightness of her nature. (pp. 51-2)

このような描写は、彼女の生命力と感覚性を暗示するが、それ故 Basil の誘う“Come out with me, Miss Tarrant; come out with me. Do come out with me” (p. 274) という牧歌的な言葉に従って、感覚

性、恋の世界へと進まざるを得ない。彼女はその点 *sexual coldness* と明らかに無縁で、彼女の恋は、火の *image* で感覚性の勝利として語られる。“*radiant image*” (p. 333) に思われる Basil の言葉を Verena は信ずるようになり、彼の言葉は、“*kindled a light in which she saw herself afresh*” (p. 333) となり、“*the dreadful, delightful sensation*” (p. 333) が彼女の心を満たし、彼女は“*everything she had adored*” (p. 333) を燃やしたいと思い、遂に“*she loved, she was in love—She felt it in every throb of her being*”. (p. 333) と感じるのである。

元来、彼女はむさくるしい Tarrant 家においてさえ、Harvard 大の学生達にとりかこまれ“*lavish her (=Verena’s) smiles on Mr. Gracie and Mr. Burvage*” (p. 104) するのを好み、“*Verena’s vocation was to smile and talk with young men*” (p. 104) と思われる少女であったし、Olive の言葉どおり、“*You (=Verena) were not made to suffer—you were made to enjoy*” (p. 253) で、苦しむ Olive に対し、喜びに生き、又、人を喜ばすことを好む感覚性の特性をもっている。

しかも、彼女の Basil への愛は、Basil を一向理解した様子はなく、無知のまま感覚性に支配されて、結婚へと走る恋であり、*love* ではなく *infatuation* といえる。そしてその結婚も Verena が18世紀のヒロインと変らぬ、男性を *please* させることに喜びを見る女性であるが故に、自らの *integrity* なしに、男性に支配される形での結婚に納得させられた点で、新しい女性運動に携っていた女性と思えぬ感覚性のみで支配され、因襲に従うという結末となる。それも、空論的に *marriage-tie* を最新の小説の如く話題にし、*free-union* を説いた小説の始めの少女 Verena と変らず無知なままでといえる。

“*inspirational speaker*” としての名声と、Olive との富裕な生活、そして生きがいであった大義を捨てて、男性的魅力の他は感覚性の悪を全て持つといえる Basil の“*slave*” となることは Verena が満足する結婚とは言えない。Basil との結婚について“*she (=Verena) only escapes with the lesser two evils*” と評する批評家もいる⁽²⁶⁾。それを暗示する

のが小説の結びの文である。

“Ah, now I am glad!” said Verena, when they reached the street. But though she was glad, he presently discovered that, beneath her hood, she was in tears. It is to be feared that with the union, so far from brilliant, into which she was about to enter, these were not the last she was destined to shed. (p. 390)

たとえ空論としても自由恋愛をかかげていた Verena が、かくも保守的男性の妻となることは、Verena の母が魔術師的魅力にひかれて Selah Tarrant と結婚したのと同じような精神性から感覚性への一種の「後退」であり、James のヒロインの伝統からはずれる。少くとも Basil にとっても Verena にとっても平穏なめでたしめでたしの結婚のはずがないことを、結末の Verena の涙は示している。

結 び

女性解放運動に関わり同性愛と恋とを対立させて扱い、異色的な「アメリカ的物語」と言われる *The Bostonians* は Olive と Basil の人物像を中心にして分析してみた時、意外にも男性・女性の対立ではなく、James に普遍的な命題、New England puritanism とヨーロッパの感覚性の対立が相変らず中心に据えられていることが明らかにされた。

すなわち、Olive はその道德性、急進的な理想によって、puritanism の伝統にあり、彼女が代表する、富による文化、教養、洗練、趣味のよさは、南部出身の Basil の貧困による趣味のなさ、地方性、保守性と対比される。しかし彼の gallantry と男性的魅力の表わす感覚性は、上品な Olive にはないもので、彼女は病的で「悲劇の殉教者」といった精神性にのみその価値がある。

そして、人並みでない美しさと魔力をもつヒロインとたたえられてきた Verena は、たしかに innocence はあるものの、その魅力は、倫理性をもたない無知に、美貌が、加わったものと知れる。まず、俗悪な父に心霊的 medium として利用され、次に Olive に心理的精神的に支配され、最後に感覚性によって Basil に支配されるという、従順のみで、自分の意志

や思想なしである Verena は、美貌ではあっても、何よりも James 文学に主要な高い精神性を持たないのだから、Olive よりもヒロインとして相応しくないといえる。

従って、この作品の中で Olive も Verena も完全なヒロインではない。二人とも諷刺の対象であるからであるが、もしこの作品が後期のような悲劇的な特質をもつならば、当然 Olive のみがヒロインとなるはずである。すなわち Olive は、後期作品の病的だが理想主義をもつヒロインの特性を与えられている。

すなわち、*The Bostonians* の直前の傑作 *The Portrait of a Lady* までは、Daisy の如く慣習上の過失を犯すことはあっても、美しく健康なそしてその裏に New England の世俗に毒されない魅力を持つアメリカ娘がヒロインであったが、Isabel には、New England の道徳性の欠陥故に、sexuality を嫌い、従兄 Ralph や継子 Pansy には深い愛を示しながら、彼女を愛する求婚者達には sexual coldness を示すといった特徴がある。*The Bostonians* では、この Isabel の特性をさらに極端にし Olive の偏狭なまでの道徳性、狂信的ともいえる理想主義から、Isabel とは異って異性を魅きつける魅力をもたない old maid の sexual coldness が、はっきりと示される。

しかし、一方では、この高い道徳性と、彼女の病的なまでに精神的な容姿は、後期作品のヒロインの特性、とりわけ Milly Theale に似たものであることから、*The Bostonians* では後期に示される肉親のみではなく、憎悪してもいい人にまで、ヒロインの示す “disinterested love” という James の理想が、Olive や Miss Birdseye の女性運動に示される事が明らかである。

このように Olive の特性 “sexual” coldness” と “disinterested love” は、*The Bostonians* において初めて、その全貌を明らかにし、後期作品への橋わたしとなる Olive の人間像の故に *The Bostonians* は重要な作品といえることができる。

- (1) F. O. Matthiessen の Henry James の後期作品が精華だとする研究書(1944)の標題。
- (2) F. O. Matthiessen & Kenneth B. Murdoch (ed), *The Notebooks of Henry James* (New York, Oxford Univ. Press; 1947) pp. 47-8
- (3) Edmund Wilson, "The Ambiguity of Henry James" (*The Tripple Thinkers* 1938) 大津栄一郎訳『ヘンリ・ジェイムズの曖昧性』, 「ヘンリ・ジェイムズの世界」(北星堂) p. 66
- (4) F. R. Leavis, *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad* (Chatto & Windus, 1948; rep. 1962) pp. 126-138
- (5) Henry James, *The Bostonians* (1886; Penguin Modern Classics, 1966) p. 27-8 以下引用はこの版により, 本文中に頁数のみで示す。
- (6) Marius Bewley, "*The Blithedale Romance and The Bostonians*", *The Complex Fate: Hawthorne, Henry James and Some Other American Writers* (Chatto & Windus, 1952; rep. 1968) pp. 11-30
- (7) Daniel Lerner & Oscar Cargill, "Henry James at the Grecian Urn" (1951), Tony Tanner (ed) *Henry James: The Modern Judgement* (Macmillan, 1968) pp. 166-183
- (8) Lionel Trilling, "The Bostonians", *The Opposing Self* (Harcourt Brace Jovanovich 1950; rep 1978) pp. 92-103
- (9) *Ibid.*, p. 95
- (10) Leon Edel, *Henry James: The Middle Years: 1882-1885* (J. B. Lippincott, 1962) p. 145
- (11) *Ibid.*, p. 141
- (12) Trilling は radical — conservative に続いて energy—inertia; spirit—matter; spirit—letter; force—form; creation—possession; Libido—Thanatos 等を対立させ, さらに ideality of youth, truth, art は America で one with age, convention, philistinism が decadant Europe で, America の表われは共感を持たれ, Europe のそれは敵意をもたれていると説明する。
- (13) 「使者たち」の Strether が Bilham に語ることば, "Live all you can" Henry James, *The Ambassadors* (1093) (W. W. Norton & Co., 1964) は作品の核とされているが, 道徳性と感覚性の融和を説いている。
- (14) (See) George Eliot, *Middlemarch* (1871-2) (Penguin Books, 1965) (she was) likely to seek martyrdom, (p. 30) Dorothea, with all her eagerness to know the truths of life, retained very childlike ideas about marriage. She felt sure that she would have accepted the judicious Hooker ……, or John Milton when his blindness had come on; or any of the other great men whose odd habits it would have

- been glorious piety to endure; …… The really delightful marriage must be that where your husband was a sort of teacher, and could teach you even Hebrew, if you wished it. (p. 32)
- (15) (See) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (Double-day Anchor Books 1957) Isabel tends to see things as a romancer does, whereas the author sees things with the firmer, more, comprehensive, and more disillusioned vision of the novelist. (p. 119)
- (16) James の初期の作品では、生命力にあふれた美しいアメリカ娘がヒロインであるが、後期作品では健康的で女性的魅力にあふれた女性は「鳩の翼」の Kate や「黄金の盃」の Charlotte の如く悪女にわりあてられている。そして病的容貌の Milly がヒロインとなる。
- (17) Lionel Trilling, *ibid.*, pp. 98-99
- (18) それどころか、Judith Fryer は *The Faces of Eve: Women in the Nineteenth-Century American Novel* (Oxford U. P. 1976; paper back ed; 1978) において、この意見は保守的というにとどまらず、作者 James の女性化に対する恐れと Basil の恐れが一致して hysterical と説く。Ransom's speech is hysterical, nearly as hysterical as some of Olive Chancellor's. This is not an example of James's irony or humour, but rather the thinly veiled point of view of a man and writer deeply concerned with preserving the "masculine" character (p. 148)
- (19) Lionel Trilling, *ibid.*, p. 99
- (20) (See) Henry James, *The Portrait of a Lady* (1881; W. W. Norton & Co., 1975) p. 175 齊藤光訳「ある婦人の肖像」筑摩書房 (1972) によれば、「家なんかどうでもいいわ」とイザベルが言った。
「それは考えが足りないわ。私くらいの年になれば、人間にはみな殻があって、その殻を問題にしなければならないことがわかるわ。殻というのは人間を包んでいる環境全体のことよ。環境から孤立した人間といったものはないので私たちは一人一人付属品の寄せ集めのようなものよ。……」と「家」の重要性を James は説く。
- (21) (See) Henry James, *The Europeans* (1878; Penguin Modern Classics, 1967) ヨーロッパ人の Felix は、従妹の Gertrude Wentworth に会ったあと、Boston 郊外の彼女の家を評している。'It's very clean! No splendours, no gilding, no troops of servants; rather straight-backed chairs, …… the inhabitants are charming. …… I should say there was wealth without symptoms. A plain, homely way of life; nothing for show, and very little for — what shall I call it? — for the senses; but a great *aisance*, and a lot of money, out of sight, ………'

(22) Susan Wolstenholme は occult imagery から *The Bostonians* を分析し、Verena は、まづ父、次に Olive 又続いて Basil の medium にされ、彼らの霊の支配に従って行動し、話している。James は Verena がこの三人との関係において人格を消滅させられていることを主題としており、Verena と Basil の love romance にしては余分なものが多すぎるのはこの occult 的主題のためと説く。occult imagery を使わなくとも Verena が彼ら 2 人より弱い人物で真のヒロインと言えないことは本論でも充分いえると思う。

(See) Susan Wolstenholme, "Possession and Personality: Spiritualism on *The Bostonians*", *American Literature* IV VIX (1978, Jan.) pp. 580-585

(23) Verena が男性からみて愛らしい娘である点に、この作品のヒロインが Verena であると誤解されてきた一因がある。又、女性運動に反感を持つ James 故にヒロイン Olive を後期ヒロインの如く、精神的高みを強調して描ききるわけにもいかなかったのであろう。もちろんこの作品が風俗喜劇であり、人物が皆諷刺されているのはいうまでもない。

(24) *The Bostonians* と occult を説く評者達は、女性運動と occult が結びついてきた事を指摘するが、倫理性という点では女性運動と occult には大きな gap がある。

(See) Susan Wolstenholme, *ibid*; Howard Ker, *Mediums, Spirit-Rapper, and Roaring Radicals* (Urbana, 1972); Martha Banta, *Henry James and the Occult* (Indiana U. P; Bloomington, 1972)

(25) この点に関して、Alfred Habegger は "The Disunity of *The Bostonians*", *Nineteenth-Century Fiction* XXIV (1969, Sept.) において、Basil と Verena の恋を伝統的な 'the intrigue plot based upon a secret' (p. 196) として興味深い分析をしている。このように 'intrigue' に考えると、その故にも Verena はヒロインの伝統からはずれている。もっとも彼の論文のすばらしさはそれよりも、'If Book First offers us the pleasures of fine characterization, caught voices, and satiric tone, Book Second entertains us with a plot' (p. 201) と彼のいう第一巻と第 2 巻の不統一を論ずるところにあるのではあるが。

(26) Judith Fryer, *ibid.*, p. 152